

## ＜ 異文化理解を視野に入れた内容重視の英語教育が 学習者の発信力の向上にもたらす効果 ＞

研究年度 令和2年度

研究代表者名 山崎 祐一

これまでの我が国の英語教育は、文法と語彙の暗記を中心とする知識偏重の教育法で進み続けてきた。ストーリーなどの学習内容とは切り離された言葉の規則の理解に重点を置いた教育が、英語に対する苦手意識や英語嫌いの学習者をますます増加させているという統計も示されている。英語学習の内容は異文化理解と相互に密接に関連しており、異文化理解を視野に入れた内容重視の英語教育を通して、このグローバル化した社会の中で、「英語を使って何ができるようになるか」、つまり、教室で学習した知識を戦略的なコミュニケーションスキルにどう転換していくかという、より実践的な英語運用能力を身に付けていくことが重要である。

英語が話せるようになることは、日本人の英語学習者にとって永遠の課題と言っても過言ではない。文法や語彙は定着したものの、それは「学力」と呼ばれる知識の蓄積であり、英語による発信力や異文化コミュニケーション能力が定着しているとは言い難い。外国語による発信には、目標言語が属する文化圏の人々から適切であると思われる言語使用が必要であり、そういう意味では、外国語学習には異文化理解は不可欠である。

そもそも、外国語を学ぶ大きな目的のひとつは、異文化圏の人々と円滑にコミュニケーションを実現するための能力を向上させることである。特に英語は国際語として圧倒的に強い通用力を持つ言語であり、たとえコミュニケーションの相手が英語圏の人でなくても、共通媒体が英語になる可能性は非常に高いと言える。「言葉」はコミュニケーションにおいて重要な役割を果たすし、頭の中にあるイメージを相手に伝える重要な道具として機能する。世界の人々とやり取りをするために、言葉としての英語を習得することは、子どもたちにとってはとても有益である。しかし、子どもたちが「英語を使って何ができるようになるか」ということを考えたとき、もしそれが異文化圏の人々とのインタラクションを通して、適切かつ効果的にコミュニケーションを実現するための能力の基礎を培うことであるならば、言葉とともに学習の「内容」を理解し、その背後に見え隠れする社会文化的要素と、その中に息づく語用的要素にも目を向けていく必要がある。子どもたちが外国の人々とお互いに意思疎通を図り、その独特のコンテキストの中で、自分とは違う世界や考え方を知り、それらを柔軟に認めながら、適切に目的を達成できるかどうかというところに、外国語学習の本当の楽しさがある。

本研究の主たる目的は、異文化理解を視野に入れた「内容重視」の英語教育の実践が、英語学習者のやり取り・発表を含めたスピーキング力を主とした発信力の向上にもたらす効果について検証することであった。語彙の暗記や文法重視で進められている従来の英語教育を Content-based Instruction に転換することによって、学習者たちの英語学習に対する意識がどのように変容するかを追究した。本来であれば、その教育の実践が、新学習指導要領（文部科学省, 2018）が言う主体的・対話的で深い学びの実現や、学習者の英語による発信力にどのような影響を与えるかを検証する計画であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大により、国内外の調査及びフィールドワー

クを当初の計画通りに進めることが困難となり、今後の継続的な研究活動とせざるを得なくなった。2020年度より小学校で英語が教科化されることも踏まえ、新学習指導要領に準拠しながら、小学校における異文化理解の要素を取り入れた内容を重視した指導法が、学習者が英語を言葉として知るだけではなく、異文化に興味を持つことや、目的や場面、状況に応じて、適切、かつ効果的に使えるコミュニケーション能力、発信力を身に付けることにつながるかどうかについて、全国規模の学会における国際学術大会で口頭発表した。フィードバックとして得られた教育実践者の意見や、国内外での事例を参考に、現在の日本の英語教育のさらなる課題を明らかにし、その有効な解決法を検討しつつ、昨年度からの取組内容と実践の経過についても報告した。また、感謝、謝罪、謙遜、断りなどについて、中間言語語用論の観点から、日本語と英語の比較を通して、日本人英語学習者の英語による適切な発信につながることに関連する著書を2冊(単著, および共著)全国出版した。発想を転換することで、簡単な文章を使って発信することができ、日本語を英語に無理やり当てはめようとせずに、英語の思考回路に沿った形で表現することが重要であることについて論究した。